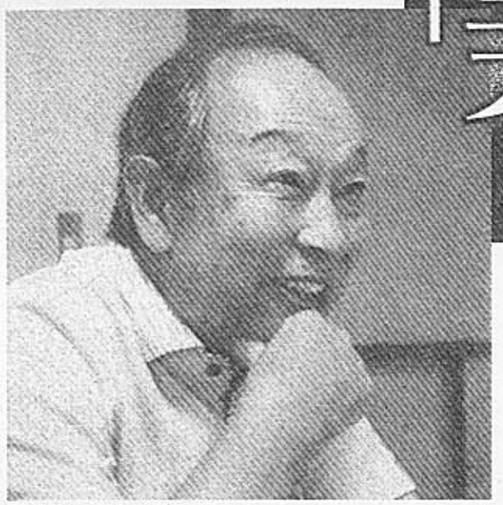
[検証シリーズ]

「美しい分煙社会」の作り方

第10回 池田清彦（早稲田大学教授）「日本社会が失った多様性と寛容」

須田慎一郎（ジャーナリスト）



「多様性なき社会」は発展しない

前回に引き続き、池田清彦・早稲田大学国際教養学部教授に「美しい分煙社会」のあり方を聞く。

池田氏は財団法人たばこ総合研究センターの評議員を務め、自身は非喫煙者ながら、強制的に禁煙や分煙を押し付ける風潮には異を唱えてきた。「たかが分煙問題」ではすまされない、この国に潜む「人を許さない社会」の脅威を指摘する。

＊

――今や、たばこを吸う人間は少数派だから「喫煙者排除の論理」がまかり通りやすいという面がある。逆に過去には多数派だったから規制できなかったという事情もあったかもしれない。しかし、そういう強者が弱者を虐げるやり方では国は発展しないし、民主的で多様な人間社会を作ることもできないのではないか。

池田　たばこの影響は個人差が大きいわけだから、一律に規制すること自体がナンセンスです。本当に国民の健康を考えているのなら遺伝子検査をして一人ひとりに見合った予防を講じた方がよほど効率的です。もしかすると、なかにはたばこを吸った方が長生きできるタイプの人間がいることがわかるかもしれない。そうなれば、全面禁煙だけでなく、分煙に対する取り組みも本気で進めなければいけない。一律というのは、あり得ない話なのです。

そもそも世の中にはいろいろな人間がいて、たとえ自分にとってたばこのリスクの方が大きいことがはっきりしたとしても、「愚かなことをする権利」だってあるわけです。エベレスト登山だってマラソンだってボクシングだって命を縮めるリスクを負っている。バイクを飛ばすのは危険極まりない行為だけど、それをやりたい人には、やる権利もある。そうした個人の権利をできるだけ守るのが近代国家の原理です。たばこだけは認めないというのは変な話ですよね。

兵庫県では「強制禁煙」が条例化しようとしている

――たばこの場合、自分が自由に吸う権利と、受動喫煙が健康被害を起こすという問題とが混同されている感がある。個人の自由を侵害する規制は論外としても、受動喫煙については「当然、悪だ」というのが通説になった。ただし、それさえ科学的には根拠があいまいだとも指摘されている。

池田　もともとは国立がん研究センター研究所の疫学部長だった平山雄氏の論文で受動喫煙の害が指摘されたわけですが、そのデータを見るとあいまいな箇所もあり、まだまだ検証しなければならない仮説だった。ところが、いつの間にかそれが一人歩きし、受動喫煙に害があるという話が定着してしまった。一番の問題は、あいまいなデータが、規制を強めて国民をコントロールしたい人たちに利用されたことです。

これは真剣に考えるべきことですが、東京都などでポルノ規制が進んでいるけれど、実はポルノはどんどん公にした方が性犯罪が減るというデータがある。これはちゃんと信頼できるデータです。ポルノを取り締まって性犯罪が増えたのでは本末転倒でしょう。つまり、権力は個人の愉しみをコントロールしたいだけなのです。人間の欲望をいかにうまく発散させて社会の秩序を保つかは大事な政治課題であり、何でもかんでも禁止するだけでは社会は成り立たないのです。

規制しない社会は豊かになる

――科学者の冷静な意見が反映されず、声の大きい一部の「活動家」の意見が政治に強い影響を与える。

池田　そうですね。明らかに人通りの少ないところを路上喫煙禁止にしたりしているけど、逆にそのエリアに隣接する地区でポイ捨てが増えている。もちろん喫煙者のマナーは問題だけど、むやみやたらに規制することが、むしろ問題を悪化させるという好例です。

――これは日本社会の拭いがたい悪弊なのか、それとも最近の変化なのか。

池田　昔の日本はもっと個人を信用していましたよね。僕の専門である「生物多様性」からいうと、もうちょっと個人の自由とか生き方を尊重していたと思います。卑近な例ですが、子供の頃、東京ではオリンピックに向けて外国から多くのお客さんを迎えるためにステテコ姿で外出するなと行政はいっていましたが、うちの親父は平気でステテコ姿で歩き回っていました。世間にもそれを許す寛容さがあったんですね。今なら「そんな格好は許されない」といわれそうです。

寛容さが徐々に失われていき、同時に多様性が失われた。すると、たばこは「全面禁煙」にしようとする。規制ばかりがどんどん作られ、確かこの10年で法律は200本くらい純増しているはずです。法律を作るたびに補助金が増える。結局、規制とは税金を垂れ流し、人をコントロールするためのシステムなんです。もともとの日本人の気質ではない。

――多様性を認めない規制社会は、自由主義経済の発展も阻害する。たばこ分煙を強制した神奈川県では、3年間で200億円以上もの経済損失が出ると予測されている。

池田　居酒屋でたばこを吸えなくなったら行くヤツがいなくなるのは当然で、誰でも予想できたことです。それより禁煙店と喫煙店を分ければいい。たとえば禁煙店が必要以上に増えれば喫煙できる店が流行り、逆に喫煙店ばかりになれば禁煙の店が流行るわけで、放っておいても均衡するのです。それが市場原理ですよ。それで何の問題もないでしょう。

どちらの客も取り込みたい店は分煙を徹底する。その設備投資にたばこ税を回すような仕組みにすれば文句は出ないでしょう。「これが正義だ」と決め付けるのは合理的ではないし、お互いが共存して楽しめるようにする方法はいくらでもあります。

――喫煙者と非喫煙者は必ずしも敵対関係ではない。互いに気を遣いながら、一緒に酒食を楽しむことも日常的に行なわれている。むしろ行政や政治が、むやみに対立を煽っているようにさえ見える。

池田　その通りです。だいたい規制賛成派は反対派を裏切り者扱いするけど、そうじゃない。多様な意見を聞いたうえで進めないと新しい知恵は生まれません。経済合理性を無視した議論などあり得ないのです。さんざん税金を垂れ流す規制を作り続け、国債を乱発してきましたが、もはやそれは許されない。このままいけば日本は取り返しのつかない事態に陥りますよ。経済原理と日本人全体の幸福を考えて何をすべきか、今こそ真剣に考える必要があります。（この項終わり）

●取材協力／入江一（ジャーナリスト）